

大谷教師塾

教員養成ナビゲーター

大谷大学
教職支援センター

第103号

2013. 1. 26

よいよく「考える」ために

センター員 中川 眞二

教員を志しているみなさんに、先輩として伝えたいことはたくさんあります。

そのなかで今回は「聞くこと」、「読むこと」の大切さについて述べたいと思います。これは、私がいつも授業のときに話していることですが、同時にその度に自分に言い聞かせていることでもあります。人間は快々として自分中心に他人の話の聞いたり、文章を読んだりしてしまいます。つまり、自分の都合のいいように聞いたり、読んだりしてしまうということです。

例えば、「400字以上で書いてください。」という課題を出されたら、「400字の文章でいいんだ。」と思ってしまう。「漢字を最低20回は書いてくるように。」と言われたら、「20回でいいんだ。」と判断する。どうですか？みなさんにはそのようなところはありますか？もちろん課題をクリアすることが大前提となりますが、教員を目指す方々にはそのような姿勢でいてほしくはありません。教員になるからというだけではなく、もしみなさんが将来教員となられたときに、自分の生徒にそのような姿勢でいてほしいでしょうか。だからこそ、最初から決めつけて聞いたり、読んだりするのではなく、ニュートラルな立場から自分はどうすべきかを考えることが必要なんだと思います。

私は中高の国語科の教員だったので、どうしても国語科関係の話になってしまいますが、「次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。」、たいていの国語の問題はこう始まります。当然問題文を読まなければ、正解を導き出すことはできません。先入観をもった、自分本位の読み方していたら、到底ふさわしい解答なんて導き出せるはずはありません。いくら思考力に優れた人でも、筆者の伝えたいことや出題

者の意図を正しくインプットしないことには、その場に応じた表現で答えることは不可能です。結局、独りよがりの答えを出すことになってしまいます。

物事を判断するとき、それがたとえどのようなことであっても、見たり、聞いたり、読んだりすることが出発点になるのだと思います。自分の聞きたいように聞くのではなく、自分の読みたいように読むのではなく、ニュートラルな立場で情報をインプットしないとその場面にふさわしい答えは導き出せません。

もし、みなさんが教壇に立たれたとき、ニュートラルな立場からではなく、先入観をもって幼小中高の子どもたちや生徒たち、または保護者と接したらどうなるでしょう。当然、それぞれの家庭には個人的な環境や事情の違いがあり、その背景を理解しておくことは大切です。けれども、必要以上の先入観をもった目は真実を見えにくくします。授業でもそうですが、生徒たちがせっかく良い意見を出したときに、それが自分の思っている意見とは異なっていた場合、つまりニュートラルな立場にいなかったときには、せっかくの発言を看過してしまうかもしれません。

最近、自己啓発関係の書籍やビジネス雑誌などで、よく「聞く力」の特集がされています。もちろんスキルアップにつながればよいのですが、出発点が間違っているのは元も子もありません。ですから教員を志すみなさんには、ただ聞いたり読んだりするのではなく、客観的な視点をもって、「聞くこと」、「読むこと」を大切にしたいと思います。そのうえで、「考えること」がより効果的な思考につながるのではないのでしょうか。



目次:

- 子どもたちと日々成長する先生を目指して  2
- 究極のところまでやってみないと物事の本質は分からない  2
- 子どもの成長に喜びを感じて  3
- 読書案内「街場の教育論」  4

教職の「スタート」を切るためには

教職支援センター アドバイザー 細谷 僚一

昨年の11月23日(金)「卒業生の実践報告会」(本号P2参照)が行われました。今回は私立高校教員と公立小学校教員で活躍されている本学卒業生のお二人をお呼びしました。内容は現職教員としての教育実践の様子や採用に向けての学生時代の取組についてです。

印象深かったのは、悪戦苦闘する採用1年目の厳しい日々の中で教師としての力を確実に身につけられていくお二人の姿です。大谷大学出身の先輩だけに、在学生にとって一つ一つの言葉は実感が伴い心に響くものだったはずで

これほど貴重なお話を伺う機会であったにもかかわらず、残念なことは、参加学生の少なさです。教職を目指すためには、こういった機会を通して自ら鼓舞し意識を高めていく必要があります。

教職に就くために、今何をすべきか。どのような準備が必要か。採用選考試験合格はゴールではなくスタートです。スタートを切るためには、学生時代に自らの手で多くの蓄えを作っておくのが鍵です。ハードルを越えるためにはたゆまぬトレーニングと助走が必要です。



先輩からのアドバイス
卒業生実践報告会
11月23日(金)18:00~19:30

先輩からのアドバイス

卒業生実践報告会11月23日(金)18:00~19:30



奥村 有花 教諭

和歌山県
上富田町立岡小学校
(2009年度・国際文化学科卒)



「子どもたちと日々成長する先生を目指して」

教育・心理学科 第3学年 中西 友紀 (なかにし ゆき)

私は、「卒業生の実践報告会」で和歌山県上富田町立岡小学校に勤務されて2年目の奥村先生のお話を、聞かせていただきました。奥村先生の話聞いて、先生がとても子どもが大好きで大切にしておられることや、子どもが楽しく学校に通える学級をつくるということをご自身の目標としておられるやさしい先生だなと感じました。

奥村先生にとってのいい先生とは、子どもが楽しく学校に通える学級をつくることのできる先生だとおっしゃっていました。だから、奥村先生は毎日子どもたちが楽しく学校に来られるようにするためにはどうすればよいかを考えておられるそうです。奥村先生は、学級経営に特に力を入れておられ、例えば、九九博士に認定した児童には手作りの冠をかぶせてあげるというように、楽しく児童が学ぶことのできる取組をしておられました。また、奥村先生は常日頃から子どものお手本となるような生活態度を心がけ、背筋をピンとするなど、自分の中での細かい取組を決めて実際に行っておられるそうです。こういったいろいろな取組が実を結んで、良い学級をつくることに繋がるとおっしゃっていました。

した。

しかし、奥村先生のように一生懸命に努力されている方でも良い学級をつくることは本当に難しく大変なことだろうと感じました。実際、奥村先生も採用1年目だった去年は忙しすぎて、大変で、しんどくて、不安だったとおっしゃっていました。でも、2年目で余裕が出てきて、子どもの嬉しそうな顔を見るのが好きで、子どもがかわいいから、どんなにしんどくても頑張ることができるとおっしゃっていました。

私は、子どもたちのために日々成長しようとされている奥村先生はとてもかっこいいと感じました。子どもたちは、沢山のパワーや感動を教師に与えてくれる。教師はもらったパワーや感動を倍にして返せる人であるべきだと感じました。だから、私も奥村先生のように、子ども達と接することを自分の原動力として、子どもたちのために良い教師をめざし、努力することのできる教員になりたいと感じました。



湯沢 保奈美 教諭

長野県
飯田女子高等学校
(2009年度・文学部史学科卒)



「究極のところまでやってみないと物事の本質は分からない」

哲学科 第2学年 林 桃子 (はやし ももこ)

湯沢先生のお話は主として自らの教育実習についてでした。特に印象に残ったことは母校での教育実習を「面接のつもりで、全力で取り組んだ」おっしゃっていたことです。実習が近づくまではなんとなしに教職の授業を受けておられた様子です。しかし、「逃げちゃいけない」と思ったことをきっかけに3年生の2月から指導案を作り始め、実習が始まったときにすぐ担当の先生に見せられるようにされたということです。実習中は「いかに多く授業をするか、どれだけ多くの時間を生徒と過ごせるか」と考え、自ら進んで行動し、生徒と関わったそうです。とても苦しいと感じたこともあったけれど生徒に支えられたともおっしゃっていました。

私も2年生になってから各教科の指導法についての授業を受け始め、その中で指導案を書き、実際に模擬授業を行うようになりました。しかし、指導案を書くのは時間がかかります。模擬授業に至っては自分がなにを言っているのか分から

なくなるくらい緊張してしまいます。そのため指導法についての授業が憂鬱に感じられることもあるほどです。

しかし、湯沢先生にお話を聞いて「よい教師になりたい」という願いをもち、意欲的な姿勢で取り組みたいと生徒にものを教えるという立場にはなれないものだと感じました。また、お話の中で「究極のところまでやってみないと物事の本質は分からない」とも湯沢先生はおっしゃっていました。

私自身を振り返ってみると、食欲に何事にも挑戦し、今やらなければならないことに全力を尽くしているとは言えません。湯沢先生のお話は自分の甘さを改めて自覚するとともに良い機会になりました。





子どもの成長に喜びを感じて

教育・心理学科 第3学年 岡 優実(おか ゆうみ)

私は11月14日(水)京都市立宇多野小学校の研究発表会に行ってきました。この小学校は私の母校で、1年生からボランティアにも行かせてもらっています。今回の研究テーマは、「表現と鑑賞との関連を深め、育成すべき資質や能力を明確にした授業のデザイン」～言語活動の充実を図る指導を工夫しながら～でした。

初めに授業公開があり、私は5年生の「風を素敵に見せよう」という授業を見ました。グループに分かれて風が吹く場所を見つけ、その場所を生かしながら、材料や用具を考えて風の動きを可視化するという造形遊びです。どうしたら綺麗に、見せられるのかを子どもたちで発想し構想し合っていました。どの班もすごく素敵な作品でした。

終わった後の全体会で、強く印象に残ったのは「認めてあげることの大切さ」についてのお話です。「教師として見ていて、指導したいことはたくさんある。でも、まず出来たところから認めてあげる。児童を認める場を多くつくってあげ

てください。」という講評された先生の指導を聞いて、まずは認めて褒めてあげることが大切だと実感しました。その上で、児童が次のステップに上がるためのヒントを与えることが教師の役目だということです。児童は少しのヒントから、発想を大きく広げていく力を持っています。私もボランティア活動を通して、その助けが出来る能力をもっとつけられるように日々精進していきたいと思っています。

最後の分科会では先生方の児童への熱い思いや願いをたくさん聞きました。教育というのは土台から作っていくものだとつくづく考えさせられました。その中で、児童が楽しんでいる姿を見ることはすごく嬉しいのだと思います。

今回研究会に参加して、教師の仕事というのは児童の成長が一番近くで見られる、最高にやりがいのある仕事だと改めて感じる事が出来ました。より一層早く教育現場で働きたいと感じました。これからも教師になるために今できる精一杯の事をしていくつもりです。



研究発表会に参加して

教職は子どもの成長を一番近くで見られる やりがいのある仕事

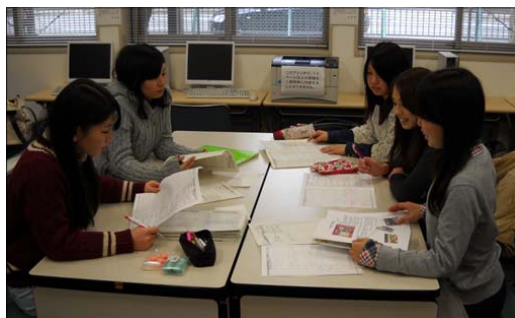
「青春時代」と「大谷大学」で、本を読むこと

～安部龍太郎の「直木賞」の受賞作「等伯」を手掛かりに～

教職支援センター アドバイザー 西寺 正

成熟した時代に突入した日本の学生の課題の一つとして、学生の読書量について日米の調査データが出ている。曰く、「日本の学生が4年間で読む本は約100冊、米国では約400冊くらい」(日経ビジネスオンライン2012)と。この記事のタイトルは「日本の大学生は勉強しない!？」である。

この数値は驚きを与えるとともに我々に反省を迫るものである。このような大幅な開きは、私の学生時代にも言われていたような気がする。米国の図書館が「読書の場」を超えた「学びの場(Learning Center)」として機能している。そして、時期的に OPEN 24 Hours と言われるところも多いと聞いていた。



教職支援センターで自主学習を行う学生たち

ところで、君は今、本を読んでいるか？

教職を目指す君は、意識してどれだけの人生を「読書」しているのだろうか？

さて、恒例の(第148回)直木賞が発表(1月17日朝刊各紙)された。この度は京都に仕事場をもつ57歳の安部龍太郎氏に決まったという。受賞作は安土桃山時代の卓越した絵師・長谷川等伯の生涯を迫力ある筆致で描き切った「等伯」(日経新聞社刊)である。

報道によれば、安部氏は29歳で公務員を辞して作家として『筆一本』で生きる決意をし、57歳で漸く「夢を叶えた」のである。

安部氏は等伯を書き上げるのに実地にどれだけの作品を訪ね対話を重ねたのだろうか？

私はこの新聞小説に連載開始の数日目(2011年1月)に偶然、大谷大学の図書館の新聞書架で出会い、出勤するとまず、読む(挿絵も素晴らしかった)のが当時の楽しみな日課となった。

その間3月に東日本大震災が起きたが「さまざまな困難を乗り越えた等伯の人生を読者の前に示すことにより、絶望に陥った人へのアプローチの手掛かりにと」安部氏は休筆することなく翌年5月まで連載を続け今回の受賞である。努力は報われた。

ご覧いただきたい。左の写真は、教職を目指す大谷大学の学生として大変好ましい姿である。コツコツと協議を積み上げ、疑問があれば周囲の図書を参考に知恵を結ぶ。諸君が「自分を受け入れてくれる大谷大学は最高の学府だ」と強く自覚した努力と読書は必ず開花すると、私は確信している。





読書案内

歴史学科 第2学年 岩田 香英 (いわた こうえい)

『街場の教育論』

内田 樹 著 ミシマ社

たつる

みなさんは内田 樹という方をご存知でしょうか？教職を目指すにあたって、どこかで名前を耳にしたことがある方だと思います。内田樹とは2011年3月まで神戸女学院大学文学部教授をされ、現在は神戸市で武道と哲学のための学塾「凱風館」を主宰されている方です。映画論、武道論なども書かれていますが、専門はフランス現代思想です。

今回紹介する『街場の教育論』という本は、内田先生の“街場シリーズ”といわれるミシマ社から出された作品の四番目に当たるものです。

そもそもこの本は2007年度に行われた神戸女学院大学の大学院「比較文化・文学」での講義を本としてまとめられたものです。読んでいる側は、まるで講義を受けているかのようにスラスラ読めてしまう文章になっています。

私はこの本を1年生のとき「教職入門」の授業で知りました。私自身、今日において教育は重要な課題であると知りつつも、取っ付きにくい問題だと思っていたときでした。タイトルの『街場』という身近な言葉にひかれて読んでみ

ようと思ったのです。

実際に読んでみると、内田先生独特の比喻(映画や流行を用いた)と言い回しに引き込まれ、「教育問題とは一体何なのか。」「なぜ、教育問題が世間でこれほどまでに騒がれるのか。」といった根本的疑問を現代の政治問題と絡めて理解することができました。第1講のなかに、「教育の根本的問題は不可能である」という章があります。そこで著者は、「教育を改革するとしても、それはとりあえず今の教育を継続しながらでしか実行することができません。」と述べています。ここから今日教育現場において、多く取りあげられる教育改革という問題がどのようなものなのかを理解することができました。それに加えて大学教育に関する内容も多く取り上げられているので、私たち大学生にも身近に感じられることも多く、とてもためになりました。

内田先生はこの本を刊行するにあたり、「学校の先生が元気になるような本」を書こうという意志のもと執筆した、とあとがきで語っています。したがって、教師を目指すみなさんには、教師という職につく前だからこそ、是非ともこの一冊を読んでもらいたいと思います。



「教職入門」で紹介された本を読んでみた



これからの予定

《 春期面接セミナー 》

- 2月13日(水) 10:30~11:30 入門編・実践編
- 3月11日(月) 12:30~14:30 実践編
- 3月21日(木) 12:30~14:30 実践編

対象学年は幼稚園・小学校・中学校・高等学校教員採用選考試験を受験予定の学生で、教員採用選考試験対策として面接セミナーを希望する者

《 教員採用選考試験志願書記入相談会 》

- 2月14日(木)~2月20日(水) 10:30~17:00
- 3月6日(水)~3月8日(金) 10:30~17:00

自ら志望する府県や都市の平成24年度実施教員採用選考試験の募集要項をもとにして志願書を実際に記入し、教職支援センターアドバイザーに点検を受け、平成25年度試験に備える。



申込み締切迫る

2013年度 教員受験特別講習
(教職教養・一般教養)

- 日程 教職教養
2月13日(水)~15日(金)
一般教養(理数)
3月25日(月)~27日(水)
- 受講料 教職教養
講習料¥6,000
テキスト料¥3,000
一般教養
講習料¥6,000
テキスト料¥1,500
両方とも受講する学生は
講習料¥10,000
(テキスト代は別途)
- 対象者 ・大谷大学文学部生
第1~4学年
・大谷大学大学院生
- 講師 東京アカデミー講師
- 申込受付 教職支援センター